



Title	<紹介>根ヶ山徹・尾崎千佳編『山口大学所蔵和漢古典籍分類目録』
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	語文. 2013, 100-101, p. 160-160
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70925
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

根ヶ山徹・尾崎千佳編『山口大学所蔵和漢古典籍分類目録』

飯倉洋一

クロス地に金文字のハードカバー上製本。背と表紙に刻された達筆の文字の筆者は誰であろう、本書の編者根ヶ山徹氏である。中を開くと、二段組みで漢籍の部には正字（旧漢字）を使用。そのスタイルは内閣文庫目録を髣髴とさせる。いまどきの大学図書館蔵書目録には珍しい贊沢な造本である。よくみると奥付には、本書が平成二〇年から平成二二年度の科研費基盤研究による研究成果であることが記されている。このテーマで科研費を獲得するのもまた凄い。

紹介者は、かつて山口大学に十四年間在籍した。山口大学所蔵の古典籍には大いに世話をなった。いずれ山口大学の各部局に所蔵されるすべての古典籍（もちろん和書に限つてのことだが）の目録を作りたいとも思っていた。それだけに、今回の目録は、非常に感慨深いものがある。

漢籍の部を担当したのは根ヶ山徹氏は中国文学がご専門。人文学部での教員会議の折に、大抵紹介者の正面に座っていたので、自然に研究の情報を交換することもあった。研究者としては厳密、教育者としても厳格な方であった。その厳密さが今回の目録にもよく表れているように思う。和書の部を担当したのは私の後任として二〇〇一年に山口大学に着任した尾崎千佳氏である。全学に

蔵される和本の目録化のことは、確かお願いしたように記憶する。尾崎氏も、厳密さ・厳格さでは根ヶ山氏に劣らない。ちなみに和書の部の凡例は漢籍とは全く別に立てられている。用字も新字体である。漢籍にはない書型の情報もある。尾崎氏の採用項目は簡にして要である。お二人の編になる本書の精確さには太鼓判を押してもよい。

山口大学の古典籍の中心になるのは、旧徳山藩主の蔵書である棲息堂文庫であるが、他に旧制高校の旧蔵書や、演劇研究者の若月紫蘭の旧蔵書などがある。根ヶ山氏の跋にも書かれているように、これらの古典籍については、一部目録化されていたが、専門家の手によるものではなく、配列なども研究者にはやや利用しにくいものであった。旧制山口高校や人文学部の蔵書については、目録も備わっていなかつた。今見ると、たとえば旧山口高校蔵書として室町後期写の源氏物語があり、旧高等商業高校蔵書として承応四年写の井形本花鳥余情などがある。

日本のすべての古典籍のデータベース化が国家的プロジェクトとして浮上してきている現在、古典籍を所蔵する大学は、網羅的な所蔵確認が必要になつてくるのだが、お二人は、所蔵確認どころが、立派な冊子体目録をいち早く作つてしまつたのである。山口大学のような総合大学で、古典籍の網羅的目録を持つところはそんなにないだろう。本書の意義は、そういう先駆性にある。

（根ヶ山徹・尾崎千佳、二〇一一年三月、二九八頁、非売品）

（いいぐら・よういち 本学大学院教授）